

子ども学探訪

編輯顧問
倉橋惣三
と
キンダーブック

⑤

生活と知を結ぶ芸術性

浜口順子
(お茶の水女子大学大学院)

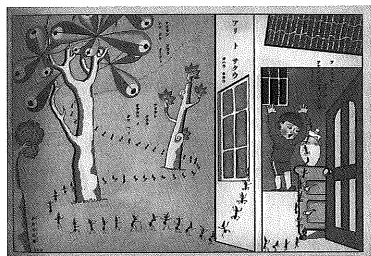
「塩と砂糖の巻」(第三輯第十一編 一九三二(昭和六)年二月)

「おしお」と「おさとう」、見た目は似ているのに、片方はしょっぱくて、片方は甘い……幼児期から子どもは、そんなことに気付き始めている。今から八十二年前、昭和の初め、キン



▲画像1 「塩と砂糖の巻」表紙

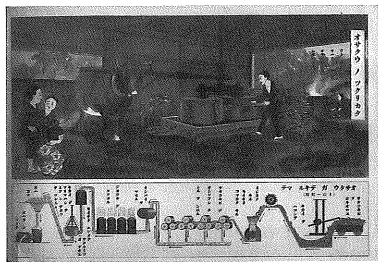
ンダーブックは「塩と砂糖」を特集した。解説のページの「序」には、「……世界の人類生活の日常食物に、保健上に、はたまた化学工業の主要原料等において、いかに文化生活上に貢献する所大きい、日常、幼児の最も親しみ、かつ好愛して嗜む食味の要素が、他面にいかに広大な世界を有して利用活用せられつつあるか、逐次本編の頁を追ひ窺うことによって、層一層幼児の視野は拡大されるであろうと信じます。」とある。表紙(画像1 絵は藤澤龍雄)には、牛と農夫が労作するサトウキビ畑を背景にして、ちよつとお姉さんの女の子と、それより小さい男の子が



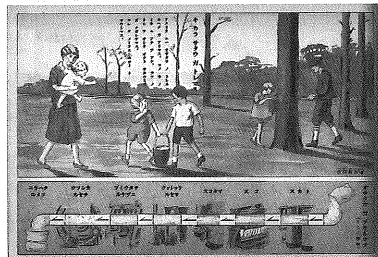
▲画像5 アリと砂糖 (武井武雄 画)

前半は「砂糖」の部で、その生産と製法と販売をテーマ(画像2、3、4)にして、社会的写実的な情報を中心になっている。その一方で、砂糖を運ぶアリたちを童話的に描く武井武雄の絵(画像5)はリズムカルな表現でひとときわ楽しい。後半、「塩」の部に移るつなぎ部分に、塩と砂糖をなめた子ども生き生きした表情を描く岡本帰一の絵(画像6)が

刈取り・サトウキビの運搬／お砂糖の作り方・お砂糖ができるまで(その2)／サトウキビ売り屋／テンサイ畑／アリと砂糖／砂糖と塩／塩田・塩の作り方／暑い国の塩田・しょうゆの作り方／岩塩／デッドシー／清めの塩／上杉謙信と塩／まいだま。



▲画像2 お砂糖の作り方



▲画像3 木から砂糖が採れます



▲画像4 サトウキビ売り屋

二人描かれている。解説には「甘藷」の原産地について、「我国でも台湾、小笠原、琉球に産し」とあり、改めてそういう時代だったのだと確認する。

内容(目次)は次のようである。耕作と植えつけ／



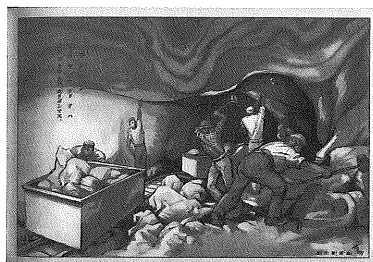
▲画像6 砂糖と塩 (岡本帰一 画)



▲画像10 上杉謙信と塩

時に、塩がいかに生命の維持に必要なものであるかを知らせる好材料だとも考えられたものであろう。裏表紙部分の「マヒダマ」(画像11)は不思議な図だ。「食塩」という幹を持つ木が、ナトリウムと塩素と直接用途という枝に分かれ、さまざまな化学製品や食料品や日用品という宝物になって実っている図。かなり専門的な内容で、大人でもなかなか全部を理解しかねるだろう。しかし、宝物がひょうたんやお

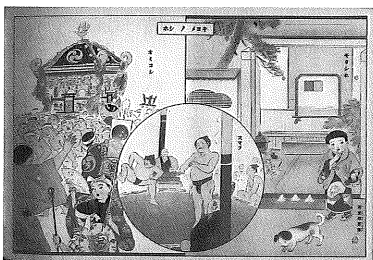
と水面に浮かんでいる子どもが描かれた死海(英語でデッドシー)の図(画像8)、塩の文
化的意味(お清め)を伝えるために「モリシホ(盛り塩)」「スマフ(相撲)」の塩、祭りで「オ
ミコシ」にまかれる塩なども描かれる(画像9)。武田信玄が敵の上杉謙信に塩を送ったと
いう逸話(画像10)は、歴史にからめて道徳性の涵養をねらいとしたと同



▲画像7 岩塩

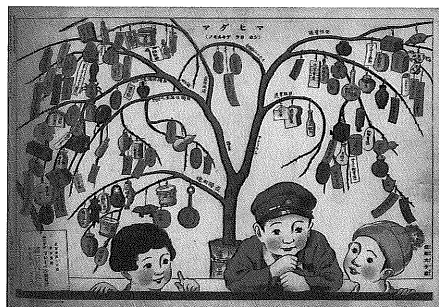


▲画像8 デッドシー



▲画像9 清めの塩

あり、ほほ笑ましい。
「塩」の部は、砂糖の部よ
り、内容がバラエティに富む。
生産・採掘(画像7)にかか
わる事柄のほかに、「シヅマナ
イカラダレデモオヨ
ゲルネ」と、ぷかぷか



▲画像11 まい玉



▲画像 12 附録

附録 岡本帰一の絶筆

鍋、樽や小判、マツチや魚加工品などの具体物をイメージしたものになって繭玉にぶら下がっているのを見れば、塩というものが何やらいろいろと有用なものに作り替えられて利用されていることは、子どもにも直観されるだろうというねらいがあるに違いない。

この号で異色なのは、急逝した岡本帰一の絶筆となった下絵と追悼文を、附録に掲載していることである（画像12）。「本誌の絵でおなじみ深い岡本帰一先生のおかくれ」とあり、岡本が絵筆を持つ横顔の写真も隅に載っている。岡本は、キンダーブックより早く一九二二年に創刊された『コードモノクニ』に多くの童画を描き、高い評価を得ていた。倉橋惣三はもともとコードモノクニの編集顧問でもあったので、その縁で同誌の絵画顧問であった岡本帰一のほか、武井武雄、清水良雄、初山滋らコードモノクニで活躍していた童画家たちの絵は、しばしばキンダーブックにも登場するのであろう。

書きかけの下絵が、しかも幼児向けの雑誌に掲載されることは尋常ではない。しかしそこに、倉橋の、岡本を惜しむ気持ちの強さがかかる。最期ぎりぎりまで子どもたちのために絵を描いた人がいたことを、倉橋は、読者に、特に子どもたちに伝えたかったのであろう。そこにはこんな文章が添えられている。「岡本先生は昭和五年も押しつまった二十九日午前六時、御病気のため、豊多摩病院でお亡くなりになりました。本誌御購読のみな様にはおなじみ深い、そし

て名高い童画家として惜んでも惜んでも余りある先生でございました。ここに掲げた鉛筆下絵は、先生が本編のために、ここまでお描きになって亡くなられた絶筆、よいかたみの下図であります。図は我国砂糖きびの主産地台湾で、砂糖きびを賣う小父さんとりまく台湾の子供たち、硬そうにきびを噛んでいる子供であります。台湾人のお家を背景に名物の水牛も見えます。見るからに懐かしみのある先生のお筆ではありませんか。」

絵雑誌と芸術性

武井武雄（画像5の作者）は「コドモノクニは非常に情操的で芸術的であつた。子どものためにはそれだけでは足りない面もある。その足りない面を補うためにキンダーブックを始めた。コドモノクニに対して科学性をもった觀察的なものを作る。必然的な意義があつた。」と後年語っている。^{注1}大正十五年公布された幼稚園令で「觀察」という保育項目が附加されたことを背景に、芸術性と同時に、事物や事実の忠実な描写が求められるようになったことは、画家たちにとって新しい試練であつたであろう。

倉橋は、幼児向けの絵雑誌が次々と作られるようになった大正期の初め、『日本幼年』という雑誌に自らかかわろうとしていたその時に、子どもだましの低廉安易な雑誌作りへの警告を発している。^{注2}「大人のものであるならば、万一多少の誤りや欠点などがあつても、読者の理解力によってその弊を免れることができますが、子供は理解力で弊を矯めることができません。子供に於いては何ら重きを置くに足りないような局部的の誤謬も甚だしい弊害の基となります。この意味において、その相手とする子供の年齢が少なければ少ない程、編纂者は

戦々兢々たる綿密の心持を持つて居なければなりません。」

そしてさらに、絵雑誌の積極的意義に関して、芸術性の高いものを見せることの重要性を強調する。「元来子供に見せる絵は大人に見せる絵に比べて芸術的価値の甚だ低いものであると云う独断からして、これを軽んずる風がないでもありませんが、これも非常な誤りであります。」「子供に絵本を与えるのは、ただ字が読めないからと云う様な軽い意味のものではなくて、絵画それ自身の芸術的力によって幼年者相当の教育を与えようとするのにあります。更に他の言葉を以て云えば、絵を以て教授の用に供するばかりでなく、その情緒全体の上に最も普遍的なかつ基礎的な教育を与えようとするものであります。」

この「塩と砂糖の巻」で岡本には二枚の絵が依頼されていたようである。その一枚は、この本の前半と後半をつなぐ「サタウト シオ（砂糖と塩の比較）」という表題のページ（画像6）で、女の子と男の子が、それぞれ砂糖と塩をなめた瞬間の顔の表情を描いたものだ。この号の全体の中で、最も子どもの生活に近いところで描かれている印象がある。「甘くておいしいわ」「そっちのほうがいいなあ」というようなやりとりが聞こえてきそうではないか。

— 続く —

（引用文は一部、現代仮名遣い等に直してあります。）

注

- 1 『フレーベル館一〇〇年史』フレーベル館 二〇〇八年 p.48
- 2 倉橋惣三「新しい幼年の讀物」婦人画報 一九一五年 p.105、pp.50-51